

# 6 広島県のインバウンド観光



富川 久美子  
TOMIKAWA Kumiko

広島修道大学  
教授

一般的にインバウンドと呼ばれる日本を訪れる外国人観光客の数は年々増加しており、広島におけるその数も毎年過去最高を更新している。原爆ドームと厳島神社という2つの世界遺産を有する広島の外国人観光客の実態を紐解くとともに、観光都市としての政策について考える。

## 日本のインバウンドと広島の人気

近年、インバウンドという言葉をよく耳にするようになった。これは旅行業界の用語であり、一般的に使われるようになったことは驚きである。その一方でアウトバウンドという用語は一般には使われず、それほど訪日旅行が注目されるようになったと言える。

訪日旅行者数は長らく低迷していたことから、国土交通省は2003年、当時の521万人を2010年までに倍増させるとしたビジット・ジャパン・キャンペーンを開始した。その目標は達成されず、ようやく2013年に1,000万人を超えたが、僅か3年後の2016年には2,400万人となった(図1)。このような政策や訪日外国人の急増によって外国人観光客への関心が高まり、彼らの訪日目的や人気の観光地などがマスメディアで多く取り上げられるようになった。

旅行情報サイト『トリップアドバイザー』の「外国人に人気の日本観光スポット」によると、2015年度の1位は伏見稲荷大社、2位は広島平和記念資料館、3位は厳島神社であり、これは過去3年間変わっていない。それ以前は、広島平和記念資料館が1位、厳島神社も上位4位内が数年間続いていた。ヒロシマとミヤジマが外国人にとって根強い人気を誇っていることが分かる。実際、新幹線で広島駅に降り立つと、非常に外国人が多い印象を受ける。しか

し、広島県のインバウンドは全国の傾向とは異なる特徴をもつ。

ところで、ここに挙げた外国人旅行者であるが、これを観光客と捉える方が多いのではないだろうか。実は、前述の旅行者統計には観光目的以外の商用や一時上陸目的も含まれている。訪日旅行者数を観光目的に絞ってみると、2016年は1,974万人であり、2,000万人に届いていない。しかし、訪日旅行者全体に観光目的客が占める割合は、1990年代から2000年代初めまで5割台に留まっていた。これに比べれば8割台になった現在は、旅行者＝観光客として捉えても許容範囲とも言えよう。同じ観光統計を基にしながら「旅行者数」を「観光客数」と表記している自治体も多い。

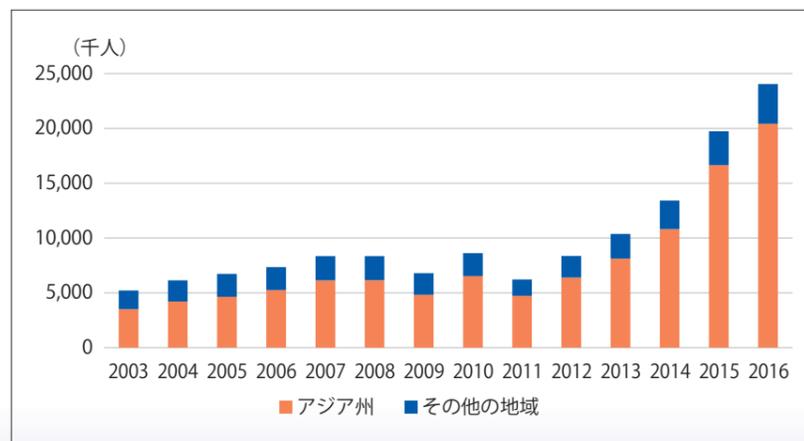


図1 訪日外国人数とアジア州からの旅行者数の推移 (2003～2016年) 【日本政府観光局 (JNTO) の資料より作成】

## 広島県のインバウンドの実態

2015年の広島県の外国人観光客数は166万1,000人であった。これは前年比59%の増加であり、4年連続で過去最高を更新した。特に中国から17万人と、前年比118%の増加であったが、これには数千人単位の大型クルーズ船の寄港が寄与している。しかし、全国的に見ると、広島県の外国人観光客数は上位に位置してはいない(図2)。東京都(訪問率52%)、千葉県(同44%)、大阪府(同36%)の訪問率が高いのは、主要な国際空港の立地などアクセスの面からも必然性があり、次に京都府(同24%)が続くのも日本を代表する観光資源が豊富なことから納得がいく。しかし、広島県(同3%)は外国人に高い人気を誇る2つの観光資源が存在する割には訪問者が少ないと言える。また、訪日外国人の延べ宿泊者数(2015年)の統計でも、東京が6,560万泊(全体を100%とした場合27%)と全国で最も多く、続いて大阪府が897万泊(同14%)、北海道が564万泊(同8.6%)、京都府が458万泊(同7%)、沖縄県が368万泊(同5.6%)となるが、広島県は74万泊であり、全体の構成比では1.1%を占めるに過ぎない。

因みに、このような都道府県別の順位において、延べ泊数と訪問者数との違いが顕著であるのは、北海道と沖縄県だけではない。意外に思われるだろうが、奈良県は広島県よりも少ない26万泊であり、全国で25位になる。前年の2014年までは、日本人を含めた延べ宿泊者数でも奈良県は最下位になる年が続いていた。通常、観光統計というと入込客数が注目されるが、経済効果などの観光効果を考慮すると、延べ宿泊数を重視すべきである。

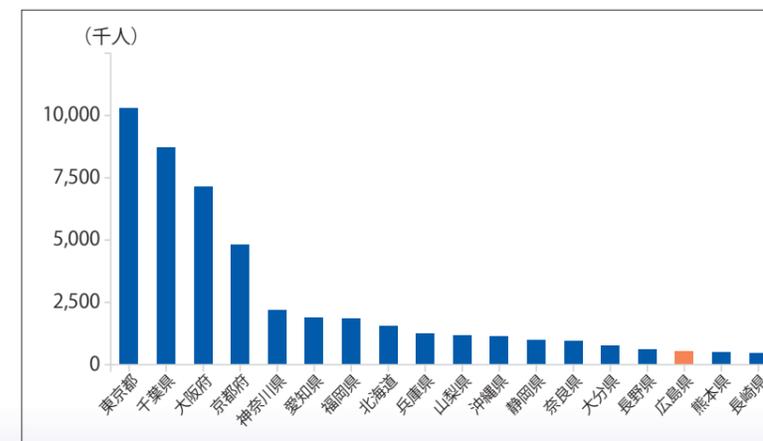


図2 上位18の都道府県別外国人訪問者数 (2015年) 【RESASにて作成】

## 外国人の出身地

図1にみた訪日旅行者数の急増であるが、特にアジアからの旅行者によるところが大きいことが分かる。2016年は訪日外国人2,400万人中アジアからが85%を占めた。そのうち最も多かったのは、中国からであり、続いて韓国、台湾、香港の順であった。それぞれ637万人、509万人、417万人、184万人と、上位4カ国と地域で全体の77%を占めた。その一方で北アメリカ、ヨーロッパ、オセアニアからの旅行者が占める割合は、それぞれ7%、6%、2%でしかない。このようなアジアからの旅行者が全体の8割を占める全国のインバウンドに対して、広島県では、アジアからの旅行者が3割程度でしかなく、欧米系が過半数を占める(図3)。また、図4の居住地別外国人延べ宿泊者数を都道府県別に見ると、広島県で最も多いのはアメリカ(15%)であり、欧州(13%)、オーストラリア(10%)と、他の都道府県との違いが一目瞭然となる。アジアからの旅行者に比較して欧米からの旅行者は平均滞在日数が長いこと、これが反映された結果になっている。広島駅構内を一見して多くの外国人がいると感じられるのは、アメリカ人やオーストラリア人などが目立つためでもある。

## ダークツーリズム

欧米系の旅行者が多くを占める広島県のインバウンドであるが、これは、世界中に広く認知されている被爆地としてのヒロシマ訪問を望む外国人が多い一方で、敬遠する外国人も多いことが地域的な傾向として表れていると言える。2015年、被爆地ヒロシマ(広島市)を訪れた外国人(103万人)では、地域別にみると欧米系が全体の6割超、中でもヨーロッパが最も多く、全体の3

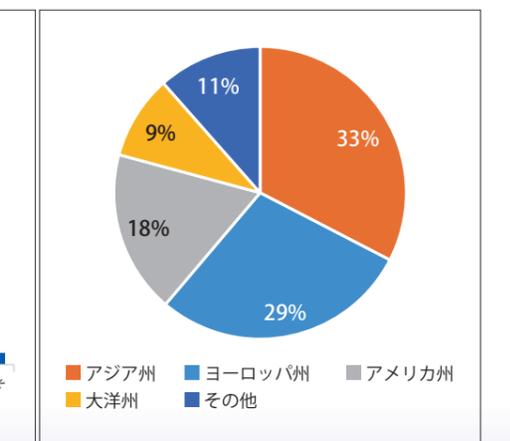


図3 広島県への地域別外国人訪問者の割合 (2015年) 【広島県観光客数の動向より作成】

割を占めた。「人気の日本観光スポット」に挙げられた平和記念資料館では、総入館者数に外国人が2割超を占め、2015年は約34万人であった。2016年5月に訪問したオバマ前大統領が折り鶴を残したことも追い風となって外国人入館者数が増加している。また、広島平和公園にある世界遺産の原爆ドームにはこれよりさらに多い訪問者数であることが想定される。

広島市のインバウンド観光には、被爆地としてのヒロシマが最も重要な位置を占めているが、このような負の遺産を対象とした観光はダークツーリズムと称される。広島県にはもう一つ、観光客が多く訪れるダークツーリズムの場所がある。それは、かつて秘密裏に毒ガス兵器を製造していた「地図から消された島」大久野島である。現在、島に民家はなく、周囲4.3kmの小さな島全体が、宿泊施設である休暇村の敷地になっている。広島市

には平和学習を目的とした修学旅行生が多く訪れるが、竹原市にあるこの大久野島が訪問先に加えられることも多い。島内には毒ガス資料館があり、砲台跡や毒ガス工場関連の遺跡が点在するため「毒ガスの島」と呼ばれるが、その数7,000とされるウサギが生息していることから「ウサギの島」とも呼ばれている。

近年、大久野島への観光客数が増加傾向にあり、2015年は54万人であった。中でも外国人が急増しており、その数は2012年397人、2013年378人、2014年5,564人、2015年17,215人と、小さな島に外国人が殺到している状況である。このきっかけとなったのは、ウサギの大群が追いかけて来る様子を撮影した香港女性の動画であった。その後、SNSやテレビ放映によって

「Rabbit Island」大久野島の情報が世界中に広がった。ウサギの島でダークツーリズムという、意外性とユニークさが大久野島の観光の魅力となっている。

### サイクリング

外国人が増えている観光形態として、もう一つ挙げておきたいのは、サイクリングである。米CNNの旅行情報サイトで2014年、しまなみ海道が「世界で最も素晴らしい7大サイクリングコース」の1つに選ばれるなど、海外でもその知名度が高まっている。近年、景勝地しまなみ海道の玄関口である尾道市の外国人観光客数は増加傾向にあるが、そのうちのレンタサイクル利用者も急増している。2012年の外国人観光客数34,000人に対し、

レンタサイクルの利用は1,361台であったが、2015年の外国人客数21万人に対しては、5,695台となった(図5)。尾道の外国人観光客の8.3%がレンタサイクルを利用したことになるが、特に欧米からの客の利用率が高い。旅行者のバイブルといわれるLonely Planet社のガイドブック『Japan』2015年版では、しまなみ海道のサイクリングについて1ページを割いて詳細な説明が掲載されており、今後も利用者の増加が見込まれる。

しまなみ海道のサイクリング客の増加は観光政策が奏功している。尾道は坂の多い古い町並みや、映画のまちとして古く知られる観光地であるが、2011年に開始した瀬戸内海の観光振興策の一環として瀬戸内サイクリングロードの整備や利便性の向上、プロモーション活動の促進が図られた。自転車と船の利用を連携させた瀬戸内サイクルーズパスが導入され、国際サイクリング大会も開催された。国内のサイクリングブームの追い風もあってサイクリング客が増加し、それに伴い宿泊施設や休憩スポットなどサイクリングに快適な環境も整備されてきた(写真1)。その結果、海外にも情報が拡がり、世界的にも魅力あるサイクリングコースとなったのである。

### 課題と政策

広島県のインバウンドは、欧米人が多くを占めること、ダークツーリズムが観光対象となっていること、そして魅力あるサイクリングコースを有すること、の3点を特徴として挙げた。さらに広島県が2つの世界遺産を有することも全国的には珍しい。ヒロシマとミヤジマは先に挙げた「人気の日本観光スポット」でもあるため、世界中から絶え間なく人々がやってくる。しかし、全国的に見ればインバウンド客は多いとは言えず、特に宿泊客を伸ばすことが県の観光政策の課題となっている。その一つにこれら2カ所をめぐっての対策がある。それは、ヒロシマからミヤジマへは列車とフェリーで1時間足らずで行くことができるため、多くの外国人観光客にとって、京都からの日帰り、もしくはさらに西へ向かう旅行の立ち寄り地となれる点である。ガイドブック『Japan』では、広島市には2～3泊する価値があると、宮島では1泊して昼間とは異なる静かな夜を過ごすことを勧めている

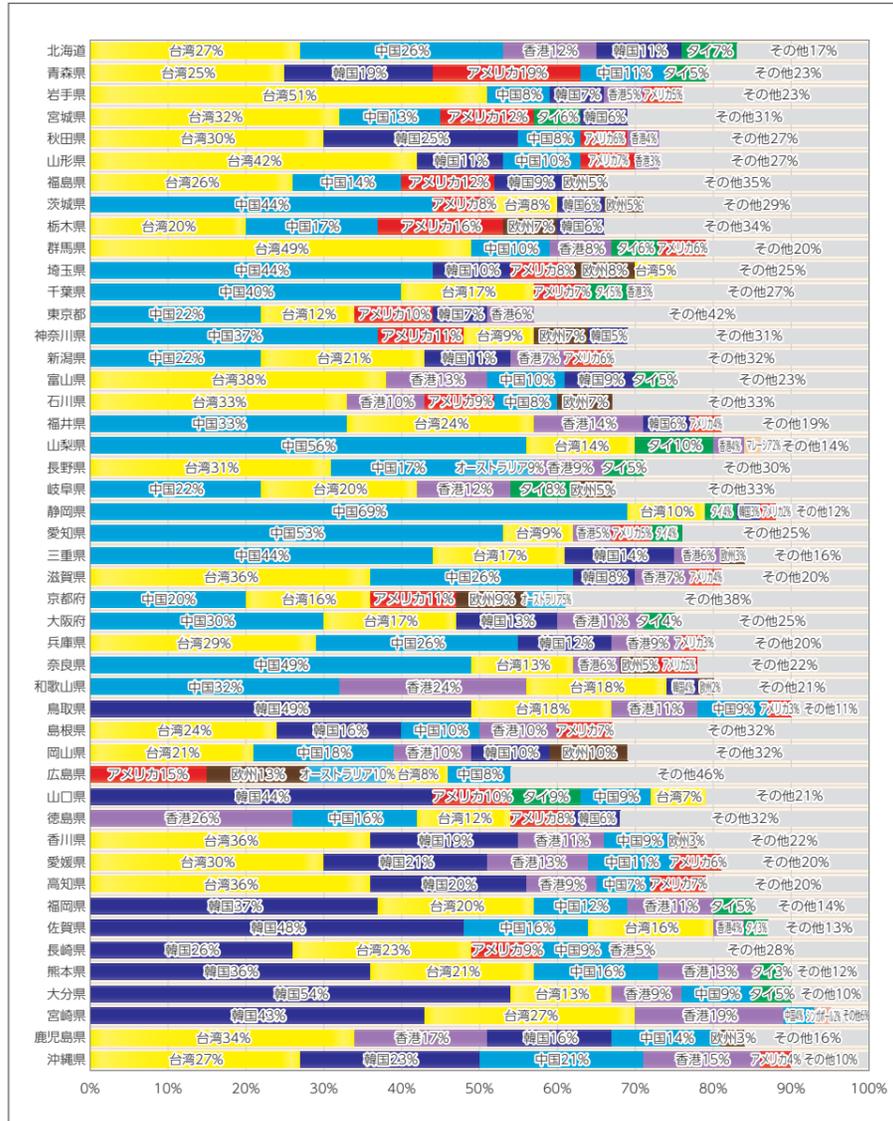


図4 都道府県別の外国人延べ宿泊者数の構成(2015年)【観光白書より】

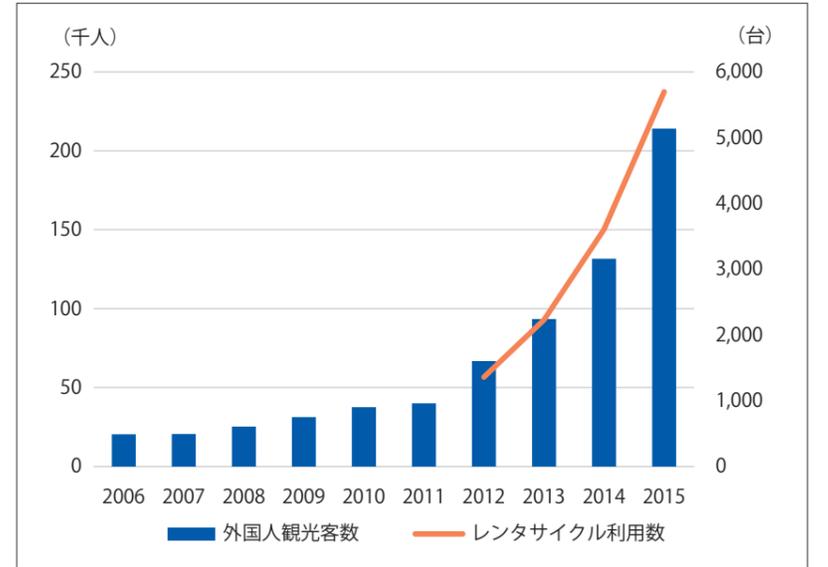


図5 尾道市外国人観光客数(左軸)とレンタサイクル利用台数(右軸)の推移【尾道市の資料より作成】



写真1 セとうちサイクルーズパスのチラシ(右)など、外国人向け観光情報の提供が県内各地、官民で進められている

る。したがって、多様な観光行動を促すことや、県内各地の景勝地や観光施設などに観光客を誘致する方策が必要となる。

インバウンドをテーマに述べてきたが、外国人旅行者は急増しているとはいえ、国内旅行市場全体における経済効果は1割程度を占めるに過ぎない。9割を占める国民の国内旅行はというと、一人当たり年間平均僅か2泊である。政府が掲げる「観光立国」、またそれを受けた広島「観光立県」の実現には、まず国内の旅行者を増やし、各地の受け入れ態勢を整備進展させることでインバウンド誘致に繋げることが重要である。